

あすけ聞き書き隊

調査団体名	あすけ聞き書き隊	団体代表者名	河合友理
設立年	2010年	対応してくれた人の名前	河合友理
団体URL	http://asukekigaki.boon-log.com/	調査員	今村豊、洲崎燈子
活動拠点	豊田市足助地区	レポート作成者	洲崎燈子
取材日	2015年 12月18日		

活動内容

豊田市足助地区に住む70代以上のお年寄りから、主に仕事について話をうかがい(最低2回)、記録に残す。1年間かけて取材と書き起こし、編集を行う。発起人は旧足助町役場に勤め、足助の地域振興に関わってきた、去年までの代表者の井上美知代さん。足助地区に受け継がれてきた山里の伝統や文化を、次世代に語り継ぐのが自分たちの使命だと感じたことがきっかけだった。

2010年に開始し、毎年1冊発行して、現在6冊目を作成中。自分は初回から参加している。スタッフは、「まだ話を聞きたい人がいっぱいいるので続けたい」と言っている。毎年、なるべく足助地区のさまざまな場所に住むお年寄りからお話を聞くようにしている。

取材者は愛知県内各地から集まっていて、他にも初回からの参加者がいる。年代は30～50代位だが、以前中学生が親と一緒に参加したこともある。

キャッチフレーズ

昔の暮らしから今の暮らしを見直す

会のモットー(何を大切にしているか)

話し手の言葉を大事にする。本人の話した言葉のみを使い、本人の口調で文章を作る。当たり前前の生活の大切さを伝える。

設立から現在に至るまで変化したこと

第1集と第2集は豊田市の「地域予算提案事業(取材者注:効果的に地域課題を解決するため、地域住民の提案を市の予算案に反映させ、地域の課題解決を進める事業)」を使って発行した。第3集以降は同じ市の「わくわく事業(取材者注:地域資源を活用し、地域の課題解決や活性化に取り組む団体を支援する地域活動支援制度)」を用いて配布分(200部)の冊子を印刷し、他にお金を出し合って販売分(200部)を印刷している。わくわく事業の助成はいつまで受けられるか分からないので、ゆくゆくは自前で発行できるようにしたい。10集は発行したい。

第3集を発行したときに交流館で発表会をした。第4集以降はより地域の人のつながりを意識して、足助病院で発表会をしている。来年2月には朗読会も計画している。お年寄りには字が小さいようなので(フォントサイズ10)、朗読を聞いて聞き書きに触れてもらうのも一つのやり方と考えた。入院している人にもふらっと聞きに来てほしい。いずれは患者さんにも話を聞きたい。

連携している団体・専門家・自治体など

NPO法人共存の森ネットワーク(聞き書きの指導)、豊田市役所足助支所、三河中山間地域で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

昔の価値観を教わることで、今の地域をよくするきっかけになる。たとえば、昔は今と全く異なり、山との関わりが重要だったと知ることが、「間伐を進めて山に入りやすくしよう」と思うきっかけになる。また、地域の長所と短所が分かる。足助出身の自分としては、ターンの人たちの活躍は嬉しいが、地元の若い人ももっとこういうことを知り、地域おこしに関わってほしい。

現在直面している課題

毎年続けることが課題。新たな聞き手の参加を増やすこと。

今後やってみたいこと

もっと若い人に読んでほしいし、聞き書きに参加してほしい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

足助地区に一つずつある中学と高校で呼びかけをして、取材者をリクルートするといいかもしれない。民俗学を専攻する大学生とつながりを作れるとなおいい。主婦にも声かけして、編集などの手伝いに関わってもらえるといい。主婦が昔の家事のことを聞くのも面白いと思う。

チームオリジナルの質問

<質問内容>聞き書きのコツを教えてください。

<答え>話を聞くときは自分が堅くならないように気を付ける。想像していたのと違う話が出てくることもあるので、話しながらインタビューされたいことを探る。予備知識のない若い人が話を聞いた方が詳しく説明してくれることがあるので、時には知らないふりをする必要も必要。また、「大変だった」「印象がひどかった」と良くないイメージの言葉が続くこともあるが、インタビューを重ねて出た「それでもいい体験だった」という本人の言葉を生かすような編集次第で、読者が受ける印象が随分と変わる。戦争体験を沢山話される人が多いが、聞きたいのは仕事の話なので、バランスを考えて構成する。世間話になってしまうと文章にできないので注意する。実際に話を聞くと、冊子には載せられないことが聞けるのが面白い。

チームオリジナルの質問

<質問内容>聞き書きを続けていてよかったと思ったことを教えてください。

<答え>お年寄りが家族に話せないことを話してくれることがある。話を聞かれるのが気晴らしにもなるようだ。「また来てね」と取材者と仲良くなったり、引きこもりがちだったおじいさんが外に出るようになったりしたこともある。できあがった冊子を渡すと喜んでくれる。10冊ほしいという人もいる。話を聞いているのと同じ世代の方が「懐かしい」と言って、毎年発行を楽しみにしてくれている。毎年続けることで地域に普及し、応援してくれる人が増えた。たとえば今、鍛冶屋さんに話を聞いている方がいる。一般的に刀鍛冶は有名で、ネットでも多くの情報が出てくるが、山や畑の仕事に使う道具の鍛冶についての情報は全くない。あるとしたら研究者の論文くらい。こういう情報が残せるのは貴重だと指導者の方に言われ、聞き書きでないと拾えない歴史があると再確認した。

その他、伝えたいこと

聞き書きを通じて分かった足助という地域の個性。足助に住んでいる人は香嵐溪を誇りに思っていると思う。町で商売をしている人はいろいろな仕事に次々チャレンジし、山間部に住む人は丁稚に出たりしてこつこつ頑張っているという印象を受ける。また、小さな集落の結束力の強さを感じることもある。足助の人は、美しい風景へのこだわりがある。山間部の人も、「草刈りしてきれいにしておかないといけない」という意識がある。自分たちも年を取ったら、「きれいな風景を維持できないとみっともない」と言えるようになりたい。今の荒れた山しか見ていない子たちにこういう思いを持ってもらうのは難しい。



河合さんの本業は和紙を漉くお仕事です



第3集以降の表紙は河合さんが手がけています



聞き書き講座(2013年7月、足助交流館にて)

平成26年度 足助地区わくわく事業

あすけ聞き書きフェス
in 足助病院
南棟 講義室
2015年
3月22日(日)
午後1時30分～4時まで

☆あすけ聞き書きフェス開催主旨&活動報告☆

☆足助の聞き書き 第5集 完成報告&作品紹介☆

足助のお年寄りの生き様を話し言葉で綴った「足助の聞き書き」。
吉野奈保子氏(共存の森ネットワーク事務局長)をコーディネーターに迎え、
話し手と聞き手とのインタビューを交えて完成した第5集を紹介。

*駐車場は足助病院駐車場をご利用ください。

お問い合わせ

090-8732-6308 (事務局 高木まで)

あすけ聞き書き隊 で検索!

ブログ: <http://asukekikigaki.boon-log.com/>

協力: JA愛知厚生連 足助病院
三河中山間地域で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会

是非いらして下さい!!

聞き書きフェスのチラシ(2015年3月、足助病院にて)